

町民の方々に愛され、
お役に立てるお店に！



現代を生きる

尾形 有紀 さん

(喫茶ここ)



「自家製ぷりん」→
こだわりたまごの濃厚さが
ぷりんの味を引き立てます。
(1日8個限定)

←「昔ながらのオムライス」
新鮮なたまごを弱火で
じっくり焼き上げ、ふんわり
とした食感が特徴です。



今回は、当別の老舗喫茶店の後を受けて4年前にオープンし、町の喫茶店として親しまれている「喫茶ここ」店長の尾形有紀さんにお話をお聞きしました。

夢を叶えるために北海道へ

出身は山形県。大学卒業後、作業服・作業用品店に就職しましたが、喫茶店を出店したいという夢を叶えるため、社会人3年目に一念発起して会社を退職し、カフェの専門学校のある札幌へ。専門学校卒業後も、定食屋さんなど1日3軒掛け持ちして料理の勉強をしました。そんな時、縁があって札幌の老舗喫茶店で修行させていただく機会があり、そのお店の落ち着いた雰囲気、コーヒーの香り、ゆっくりと流れる時間に魅了され、レトロな喫茶店を出店したいと思うようになりました。

町内の空き店舗を利活用

独立を考えた時に相談したのが、前職の上司でとてもお世話になっていた現・喫茶ここオーナーの中山裕介さんです。中山さんは

退職後にカウンセリングのお仕事をされていて、心の病を患った方が何気なく会話ができる場があれば、うつ病の予防につながるのではないかということで、一緒に喫茶店を始めることになりました。中山さんの奥様が当別出身ということもあり、接客などのサポートをしてくれることに。現在は私と奥様でお店を切り盛りし、オーナーが企画やチラシのデザインを担当して共同経営しています。

お客様の声を大切に

2018年11月に喫茶ここがオープン。当初は売上が苦しい時期もありましたが、オムライスは何度も食べに来てくれるお客様が多かったので、オムライスを極めようと思えました。オムライスのメニューを約10種類まで増やすと同時に、定番のオムライスに改良を加えました。初めは半熟でとろとしたオムライスをメインに提供していたのですが、お客様から少し固めに焼いてほしいという声があったので、ケチャップライスを卵で包み込む昔ながらの

スタイルに変更。これが功を奏して、喫茶この看板メニューとなりました。今でもお客様の反応をよく観察するようにして、お客様の声をメニューやサービスに取り入れるように心がけています。

皆さんのお役に立ちたい

夢は喫茶この「全国展開」です。心に病を抱えてしまった方が、喫茶このような小さなお店で働き、少しずつ自分たちで生活できるように支援していく、そうした社会貢献ができればと考えています。これはオーナーが当初から掲げている夢なのですが、まずは当別で一つのモデルを確立し、いつか全国に展開できればと思います。私も実家のある山形に喫茶ここ2号店を出店してみたいです。

私の個人的な目標は「町長」になることです。町長というのは少し大きな表現でしたが、町長のように町民の誰もが知っていて、愛され、お役に立てるお店や人になりたいと思っています。小さな喫茶店ですが、皆さんの生活の一部になれば幸いです。

とらべつ

歴史余話

2年前の秋、家族で道民の森を訪れた折、寄り道をして「見晴らしの松」と呼ばれるイチイの巨樹を見に行くことにしました。場所を調べると、道道11号月形厚田線沿いにあるようです。道路脇に草が刈りとられている部分があり、そこから森に分け入ると思わず息をのみました。周囲の樹木を圧倒する大木が眼前に現れたのです。直径2メートルほどもある赤茶の幹から枝が勢いよく伸び、針状の濃緑の葉がびっしりと茂っています。

樹のそばに由来が書かれた看板がありました。それによると、樹齢は1300年以上（飛鳥時代!）と推定され、「大正3年に付近一帯が山火事におそわれたとき、周囲の樹木がすべて焼失したにもかかわらず、この木だけは一本の枝も被害をうけずに生き残りました」とあります。

ここ青山地区は、いまは当別ダムの建設で集落はありませんが、明治中期から開拓の鉞が入れられた歴史を持ちます。平地では農業、山間では林業が盛んでしたが、同時に度重なる冷・水害に苦しめられてきました。先人たちは、この屈強なイチイに自分たちを重ね合せ、「神木」として大切したのでしょ。

当別町史の編纂に関わるようになって、もうひとつ忘れがたいイチイとの出会いがありました。当別神社の境内に立つ、樹齢350年といわれる「開拓記念樹」です。伊達邦



見晴しの松

第16回 未来へ手渡すバトン

ライター

井上 美香

直公率いる踏査隊がこの樹の下で露營したゆかりの樹で、後年には当別川が大洪水になった時、この樹に舟をつないだ女性が難を逃れたと伝えられており、長く保護されてきました。

ところが、2018(平成30)年9月の台風で隣接する木が倒れ、イチイを直撃、高さが半減するほどの損傷を負ったのです。筆者がこの樹に初めて対面したときは、すでに幹が折れた痛々しい姿でしたが、残った枝から青々とした葉が伸び、懸命に生きる姿に感動を覚えました。

この2本のイチイの古樹にまつわる伝承には、開拓の時代を生きた人々の願いや思いが色濃く反映されています。「文化」とは、「民族や社会の風習・伝統・思考方法・価値観などの総称で、世代を通じて伝承されていくものを意味する」と辞書にあります。自然物であるイチイですが、当別の歴史を語り継ぐ文化財でもあるのです。

町内の各地区にも、人々の暮らしに寄り添ってきた樹木があることでしょう。2004(平成16)年から始まった、美しいまちづくりを目的とする「大きな木認定事業」は、こうした歴史文化を発掘する機会にもなるはずです。文化は時代や地域によってさまざまな顔を持ちます。町のかたちが変われば埋もれていくものもあります。それらを丹念に拾い、顕彰していくことは、未来にこの地で生きる人たちへと手渡す大切なバトンなのだと感じます。



開拓記念樹